

根雨近藤家の歴史

——あるたたら製鉄業者の軌跡——

木村時夫

はしがき

根雨（ねう）は岡山駅で伯備線に乗換え、それが岡山の県境を越え、鳥取県に入って間もなくの、山峡の小駅で、今は鳥取県日野郡日野町に属する。岡山県の新見（にいみ）市と鳥取県の米子市のほぼ中間に位する。

昭和五六年十一月四日、私は同僚掛下栄一郎氏と共にここを訪れた。同地出身の勝瀬康三氏（昭和一七年政経学部卒業、現株式会社八重州サービス社長）のお招きによってである。私が初めて勝瀬氏にお会いしたのはこの年の六月二二日の夕刻、大隈庭園において掛下氏から紹介されてである。当日は応援歌「紺碧の空」が生れてから五〇周年ということで、大隈会館を会場に、春秋会の手によって、盛大な祝賀会が開催され、私も招待されたその席上においてである。

勝瀬氏は根雨尋常小学校六年生の時、当時慶応大学に在学していた、次兄士郎氏がたまたま東京から持ち帰った

レコードで「紺碧の空」を聴き、その明るいメロディに心奪われ、早稲田への進学を決意したという人物である。⁽¹⁾

さらに同氏は昭和四八年八月、根雨の日野川の畔、二百余坪の一面芝生の敷地内に、六五坪の二階建て紺碧寮を建設し、庭内の掲揚塔には、今も常時早稲田の応援旗をひるがえさせている。そして建物内は小早稲田博物館といってもよいほど、「紺碧の空」関係の資料をはじめ、東京専門学校以来の数々の資料を集めている。愛校心の強い同氏は、早稲田関係者の著述といえは、その種類を問わず収集したようで、出版部から刊行した私の書物までが書架に収められていた。

しかし私が根雨を訪れたのは、その紺碧寮訪問が主な目的ではなかった。根雨にはたたら（鑪）製鉄の経営者として、慶長年間以来、実に三五〇余年の歴史を誇る同地方の素封家近藤家があり、それは勝瀬氏の本家筋に当るのである。

勝瀬氏はその本家筋に当る近藤家が江戸時代末期以後明治時代中期にいたるまで、たたら製鉄の経営によって中国地方きっての名門として隆盛をきわめながら、何故大正に入り、第一次大戦を境にその火を消さねばならなかったのかという疑問を抱いておられた。

もう一つは、勝瀬氏をはじめ近藤一族には慶応と早稲田の出身者がきわめて多い。近藤家から出て勝瀬家を継いだ八郎治、すなわち勝瀬氏の祖父にあたる人も、またその弟近藤房吉も明治初年の慶応義塾に学んでいる。同時に早稲田に学んだ者も勝瀬氏をはじめ、今日では女子四名を含み二七名を数えるという。

勝瀬氏の疑問の第二は根雨という山陰の一僻地から、しかも明治の早い時期に、近藤家がかくも多くの子弟を教育のために東京に送り出したのは何故であろうかということである。今でこそ根雨は鉄道によって山陽線とも山陰

線とも結ばれているが、その無かった時代における交通の不便さは言語に絶したであろう。

明治二三年八月、島根中学校赴任のため東京を發つたラフカディオ・ハーンは、姫路まで汽車を利用し、そこからは人力車に乗り、津山をへて日本海側に出るまで、実に四日間の旅をしている。⁽²⁾

このような困難を冒しても子弟を東京に送り出したについては、近藤家なり同地方なりに、特別の事情があったのではないかというのが、勝瀬氏の長い間の疑問なのである。

私はそのいずれの疑問に対してもこれを説明するだけの専門的知識はない。しかし親しく現地に臨み、近藤家の所蔵する文書にでもふれたら、何らかの手掛りでも得られようかと考え、根雨訪問となったのである。

根雨は周田を山で囲まれ、日野川に沿って南北に開けた宿場町の面影を今に残していた。出雲街道はここで山陰道に合流しているので、松江―米子―根雨―四十曲峠―勝山―津山―佐用―姫路という松江藩主の参勤交代の道筋に当り、本陣跡もあった。家並の下を流れる清冽な流れが印象的であった。家々も昔のベンガラ塗りを残しており、日野川にかけられた祇園橋からの眺めとともに、小京都と喧伝される所以である。

以下は到着の翌日、勝瀬氏の案内で訪問した近藤家において、支配人恩田謙氏のご厚意で披見した近藤家文書のいくつかによってまとめた、勝瀬氏に対する報告書のごときものである。

たたら製鉄とその発展

鉄と人間との関係、そして鉄が文明の発展に寄与したことはきわめて重要である。鉄器の製造とその使用が強大

な王權の成立をもたらしたことは、洋の東西を問わず、歴史の明証するところである。

古事記が記す八岐大蛇（やまたのおろち）や、その尾から出た叢雲の劍（むらくものつるぎ）のいわゆる神話も、前者を簸川（ひのかわ）＝現在の斐伊川＝の河流およびその沿岸に産する砂鉄の酸化した光景をさすのではないかという説がある。そして後者は出雲部族による鉄器の製造と、大和部族がこれを征服した歴史事実を象徵するのではないかという説もある。

古来から中世にかけて、日本では全国各地で製鉄が行われているが、質量ともにぬきんでいたのは、中国山地を中心とした美作、伯耆、備中と、その北部日本海側の出雲地方と、南の瀬戸内海に面した、備前備後地方である。それは同地方の山々が風化した花崗岩や安山岩から成り、それが一〇％前後の純良な鉄粉、すなわち砂鉄を含んでいるからである。日本の製鉄はもっぱらこの砂鉄を原料として行われたもので、鉄鉱石、いわゆる巖鉄を原料として行われるようになるのは明治以降のことである。そのことは有名な徳川時代の学者で、鉱山の調査にも従事した佐藤信淵についても言えることで、彼が説いたのもっぱらたたらと砂鉄による製鉄のみで、鉄鉱についてはふれるところがないという。⁽³⁾

また同じ砂鉄でも中国南部の赤目（あこめ）と呼ばれるものより、北部とくに日野地方の真砂（まさ）と呼ばれるものの方が純良であった。特に印賀鋼と呼ばれたものは日本刀の材料として名高く、それは「建長年代（一二三世紀中葉）印賀阿太上山に於て古都（ふるいち）勝蔵の先、古都信実の二男文次郎信賢の手によりて始めて精煉せられしものゝ如し」⁽⁴⁾とある。

さて、たたら製鉄のたたらとは何であろうか。『広辞苑』には「踏鞴」とあり、①足で踏んで空気を吹き送る大

きなふいご ②踏鞴による製鉄、と説明している。

踏鞴はまた鑪とも鑪とも書く。これはたたらが単なるふいごを意味するだけでなく、それを用いての製鉄から、さらに採鉄、溶解、鍛冶等の製鉄に関する一切の施設を総称するものに転化していったからである。今日全国各地に残る、「多田羅」「多々羅」「多多良」等の地名も、もとはこのたたらと関係があらう。

その語源についても諸説があるが、アジア大陸の東北部を故地とする韃靼人、すなわちタタールからの転化であるとする説が有力である。それはタタール人の所持する革袋が製鉄作業に必要な送風用の道具、すなわち踏鞴に使用されたからであらうという⁽⁵⁾。ちなみに歌舞伎所作の一つに「たたらを踏む」というのがあるが、それがこの踏鞴を踏む動作からきたものであることはいうまでもない。

つぎにたたら、製鉄は、具体的にはどのような手続きで行われるのであらうか。それはまず山中といっても河流に近い山腹における採鉄から始まる。風化した質のもろい花崗岩を粉末にし、円錐形に掘った穴（これを鉄穴^{かんな}といい、これに従事する者を鉄穴師^{かんなじ}といった）の中に入れ、河川の水によって選別して砂鉄を得る。そしてその近くに築かれた炉により、木炭によって溶解して銑を得るのである。さらにその銑を鍛冶して鍛鉄や鋼を精製するのである。これら一連の作業を野鑪（のだたら）という。

野鑪というのは、採鉄のために次々と鉄穴を掘って移動し、そのたびに炉を築き、鑪の設備をして一箇所に定住することがなかったから、そう呼んだのであらう。たたら、製鉄用の炉は今日の耐火煉瓦でも用いて固定したらよいと考えられるが、それは不可能であった。何故ならばたたら、製鉄用の炉の素材である、その土地土地の粘土は、単に高温を保持するためのものではなく、その粘土を構成する諸分子そのものが、高温によって砂鉄の中に溶解し、

砂鉄中の不純分子を除去する効用をもっていたからである。すなわち一度使用した炉は二度目からは不純分子を除去する役割を果たさなくなるのである。そしてこれは後に鑪が固定するようになって、炉だけは常に一作業（一代）^{ひとよ}という）ことに改築されなければならなかったのである。

中世以降、鉄の需要が増大するにつれ、この野鑪形式は多くの改良を迫られるようになった。それは量産化と集中化と定住化とであった。

量産化とは次々と鉄穴を掘って移動する方式を止め、砂鉄原料の土砂を採掘する場所から、河川の下流に向かって細長い溝と樋を作り、これに原料となる土砂を大量に投入するのである。そうしてこれに河川からの水を流入させ、比重法によって軽い土砂を流し、比重の重い砂鉄だけを、樋の最後に設けられた沈澱池に沈澱させるのである。溝と樋とは長さ四杆に及ぶこともあった。これを鉄穴流し（かんながし）ともいった。

集中化とは、沈澱池の近くの平地に建物を建て、炉を固定化し、銑を製造するとともに、これを鍛冶して鋼にし、さらにそれを加工して商品化する作業を、その建物内もしくはその近傍で行い、効率化を計ったことである。砂鉄を溶解するためには多量の木炭を必要とするが、それもこの建物の周辺に集積された。

定住化とは右の集中方式にともない、鉄穴師も鍛冶師も鑄物師（いもじ）も、そして炭焼人も、従来の移動生活を止め、その建物の周辺に定住するようになったのである。そしてその建物をも高殿（たたら）と呼んだ。すなわち野鑪方式は高殿方式に進化していったのである。

現在でも島根県飯石郡吉田村には重要民俗資料として菅谷高殿の遺構が現在しており、根雨の日野川沿いには溝や樋の遺構が残っているという。⁽⁶⁾

なお右の菅谷郷において、昭和四四年一〇月、当時すでに九〇歳をこえていた村下（むらげ——たたらの最高責任者）の指導の下に、たたら製鉄の作業を再現し、三トン以上の良質の鋼を得たという。これには東京大学生産技術研究所の研究員が参加し、それが今日いうところの直接製鋼法に当り、冶金技術としてきわめて重要なものであることを確認したが、その製法を理論的に解明することはできなかったという。⁽⁷⁾

なおつけ加えるならば高殿方式の段階では、砂鉄から得た鉄を鍛冶して鋼を得る方式に代って、鋤押（けらおし）という、砂鉄から直接鋼を得る新方式が開発されていたという。

近藤家の出自とその製鉄経営

右にのべた高殿方式がいつ頃から行われるようになったかについては、室町時代とするものと、江戸時代の安永年間（一八世紀末葉）とする二説があるが、後者が妥当と思われる。なぜなら根雨地方においてたたら製鉄の最盛期を現出した近藤家においても、この定住式を採用するにいたったのは、四代平右衛門の時からであるからである。平右衛門は文化八年（一八一）生れで、明治六年（一八七三）に歿している。それまでは従来の野鐘方式をとっていたらしい。したがって安永年間というのは、たたら製鉄の先進地帯ともいべき出雲地方においてそれが始められた時ではなからうか。ちなみに四代平右衛門は出雲の人、岡新右衛門の第二子で、三代平右衛門の養子となり、先進地帯の新方式を根雨地方に導入したとも推測される。

それはともかく、近藤家の二代喜兵衛が日野郡笠木村字谷中山（現日南町笠木）に製鉄所を設けてたたら製鉄を

創業したのは安永八年であった。安永年間というのは將軍家治の下で、老中として田沼意次がその權勢をたくましくした時代である。田沼の施政については今日も様々な誤解が行われているようであるが、その殖産興業政策のために、新知識、新技術普及に努めたため、一般民衆の間に旧套を脱し、新時代を現出しようという機運と活力とを呈した時代で、その功績は評価されるべきである。西欧の科学を取入れるとともにその実用化を計りながら、志なかに致した平賀源内の死が、同じ安永八年であったことを考えると、その時代の風潮を理解することができる。さてここで近藤家の出自についてふれなければならない。

近藤家は根雨の草分けでも土着の家柄でもない。近藤家の本家である上近藤の始祖伝兵衛は、備後国（現広島県）から一家をあげて根雨に転住してきたという。いまその年代を明らかにすることはできないが、江戸時代の初期、といっても元祿以降ではなかったろうか。しかも伝兵衛は鉄関係の商人であったという。そして現近藤家の初代彦四郎はこの伝兵衛の孫に当る。そして彦四郎の子、二代喜兵衛が製鉄業を創業したわけである。

近藤家の祖先が土着の家柄でなく、備後の鉄関係の在方商人であるという、その出自をことさらに強調したのは、そのことが根雨地方における製鉄業と重要な関係があるからである。というのは先に記した印賀鋼の創始者古都信賢はその一族の名からして武士の出自であるように思われる。出雲地方における製鉄業者の三名族、田部、糸原、桜井の三氏も、その祖先はすべて武士であったという。恐らく中世以降、戦国時代にかけて、何らかの事情によって地方に逃れてきた武士もしくはその末裔であったろう。（補一）

ゆらい中国地方における製鉄経営者には、このような武士が一族郎党とともに開墾に従事して土着し、やがて、た、製鉄を創始し、それに必要な木炭の入手のため、やがて山林地主に発展していくという、中世的土豪型ともい

うべきものと、近藤家のように、すでに他地方において商業に従事し、それによって得た資本をもって転住し、製鉄業を創始して地主化していく、商業資本家型との二つの形態があったという。

根雨の附近にも、先に述べた古都家をはじめ、阿毘縁（あび縁）の木下家（慶長五年創業）、黒坂村の緒方家（慶長年間創業）などは、その創業時代からみて商業資本家とはいいい難く、前者に属するであろう。そして享保年間創業という大宮村の段塚家は後者に属したであろう。

このような近藤家の出自はその製鉄経営についても特色が見られる。その第一は後にも詳しくふれるつもりであるが、絶えず技術上の革新を怠らぬということで、それが次第に消滅していく同業者の中に在って、最後まで、たらの火を守り抜いた原因であったと思う。第二には附近住民との関係において、独占的ないし専制的な傾向がなく、常に共存共栄的立場を保持していることである。

四代平右衛門がたたら製鉄の集中化、定住化を創めるのも、それが量産化を前提としていても、同時にそのことが地域の経済に寄与し、直接的には地域住民の生活の利益を考へてのことであったと思う。

近藤家第五代喜八郎は明治五年の地租改正に際し、附近の山林を大量に買収し、後年における山林地主の基礎を築いた。しかしこれは人の弱味につけこんだ不当利益の獲得を狙ったものではなく、その反対であった。根雨地方の農民は従来無税であった山林が、地租改正によって課税の対象になることを知り、捨て値で手放す者が多く、近藤家にもその買収交渉があったという。喜八郎は番頭の反対を押し切って、当時の時価の数倍で買い取ったという。商人としての目先の利いていたことも指摘できようが、そもそものは地域住民の利益を考へていたのである。そのことは『日野郡史』に記す、彼の私財を投げうっての開墾事業によっても知られるであろう。すなわち

地や米沢村（現江府町）大字宮市字如来原と称する所にして、元曠漠たる一村共同の養草地なりき。往年開墾計画を立てし人ありしも、水利の便なきが為に其志を達するを得ざりき。偶々根雨宿の富豪近藤喜八郎大いに企画する所あり、実地踏査の上愈々決意をなし、明治十三年三月島根県（当時鳥取県は島根県に合併）へ開墾の出願をなし、同年六月許可を得、直ちに工事に着手せるが……竣工は実に明治二十年六月なり。耕宅合せて二十余町歩、……一村の構造をなせり。工事費約六千五百五十拾円、……今や美田と化し村人深く之を徳とせり。⁽⁸⁾

この近藤家の商業資本家としての製鉄経営は、旧藩時代における鳥取藩の製鉄業に対する独自の政策によく適合し、結果的には近藤家の事業を發展させたと思われる。

鳥取藩の製鉄に対する独自の政策と対比されるのは隣藩松江藩のそれである。一口にしていえば鳥取藩のそれが自由競争主義であつたのに対し、松江藩のそれは極端な藩営独占主義であつた。すなわち松江藩は早くも享保一一年（一七二六）に「鉄方法式」というものを制定し、たたら一〇カ所、鍛冶四軒、鉄山師八人と限定したばかりでなく、木炭用の林野と鉄穴の地域を指定して、自由な伐採や採掘を禁じた。そしてそれが、先にも記した、田部、糸原、桜井という製鉄の三名族を中心とする、独占事業の形態をとらせていたことはいうまでもない。またその製品も藩による専売方式をとっていた。これは幕府がとつた株仲間組織にも似たもので、特定業者を藩が保護し、その独占的發展をはかるとともに、それら業者と藩との共生関係を維持したものである。

これに反し鳥取藩は鉄の生産過程に対しては、何らの制限も統制も行わなかった。しかし鉄そのものの流通、販

売に關しては藩營の形式をとった。すなわち天保六年（一八三五）に境村（現境港市）に鉄山融通会所を設け、全国への鉄の移送販売はすべてこの会所を通じて行われることとした。しかも同会所に集積されるまでの、藩内すべての産鉄は一度鉄類預所に集められることとした。この預所に鉄を集荷するためにはかなりの資金が必要であつたはずであるが、それは鉄山師や豪農、豪商の共同出資により、また出荷品に対する為替金を融資する出銀座（でぎんざ）——一種の銀行——も併設されており、これもまた出資者であつた。いわば鳥取藩においては、民間資本と藩の統制によつて鉄の流通を計るという半官半民の方式がとられていた。したがつて松江藩のように、鉄山師に対する保護も統制もなかつた代り、鳥取藩における鉄山師は常に激甚な自由競争にさらされ、その興亡は甚しかったといわれる。しかし資本力の豊かな鉄山師は、それだけ出資高を増加して利益をあげるとともに、藩財政に対する発言権を増大させることができた。近藤家第三代の平右衛門は、右に述べた鉄類預所の筆頭役人に就任し、後に第四代平右衛門と共に藩から大里正（だいりせい）という、村役人の重鎮ともいふべき地位に就かされていることから考えても、近藤家がこの鳥取藩独自の鉄政策の下で、その経済力とともに政治力をも併せて強化していったことが分る。

なお注目しておかねばならないのは、天保六年の鉄山融通会所設立後においても、近藤家は大坂に支店（備後屋喜兵衛店という）を設置して、自家の産鉄だけではなく、広く伯耆、美作、備中等の産鉄をも販売している。そして天保一〇年度における販売量は一万一三五三束で、その地域は和泉、駿河、美濃、伊勢、近江、尾張等一三カ国に及んでいたという。これは当時における近藤家とその勢力によつて藩の統制の枠外において、その販売を許されていたということであろうか。⁽⁹⁾

近藤家の盛衰と経営上の苦心

日野川に沿う根雨の地帯が、良質の砂鉄を含む風化した花崗岩にめぐまれ、またその溶解に必要な木炭の原料としての松、栗、榎、ぶな等の樹木が豊富な森林地帯の中にあつたことは先にも記した。そしてこのようなたら、製鉄に必要な立地条件にめぐまれていたから、新興商人たる近藤家はその二代目喜兵衛の時、自から製鉄業を創始したのである。

この喜兵衛の末年には製鉄所二カ所、鍊鉄製造所四カ所にまで発展し、一カ年の生産高も鉄鉄最多八一、五〇〇貫、最少三八、〇〇〇貫、鍊鉄最多三〇、七〇〇貫、最少二三、〇〇〇貫に及んだといふ。¹⁰⁾

三代目平右衛門——安永八年（一七七九）→安政四年（一八五七）——については、前節において彼が鳥取藩の鉄類預役や大里正に任命されたことを述べておいたが、父の事業を継承して大いにこれを発展させた。すなわち日野郡内以外の美作国真島郡新庄村（現真庭郡新庄村）に製鉄所一カ所、鍊鉄所二カ所を増設している。

近藤家の所蔵するその肖像に、儒者藤沢南岳が賛した中に「之ヲ聞ク。君年十三、始メテ鉄ヲ岡山ニ鬻グ。時人呼ンデ神童ト為スト（原漢文）」とあるが、江戸時代末期における近藤家の商工未分の状況を知ることができる。

第四代平右衛門についてはすでに、彼の時代において製鉄業の集中化、定住化が始められたこと、および先代と同様、大里正に任命されたことを先に記した。

彼は文化八年（一八一二）に生れ、明治六年（一八七三）に歿しているが、近藤家の製鉄業はこの時最盛期に達

している。すなわち製鉄所は計六カ所、鍊鉄所は計八カ所を経営するに至り、年産は銑鉄最多二八二、八〇〇貫、最少一七〇、五〇〇貫、鍊鉄最多、一三四、〇〇〇貫、最少七〇、〇〇〇貫に及んでいる。彼が操業の集中化、諸職人の定住化を計ったのは、このような事業そのものの拡大が有力な原因をなしたと思われる。

た、た、製鉄には多量の木炭を必要とするが、一工程（一代）は三昼夜ないし四昼夜を要し、それに要する木炭は三、〇〇〇貫であつたという。したがって一製鉄所における木炭の年間消費量は約三〇万貫で、これが六カ所であれば一八〇万貫、さらに鍛冶工程で一〇〇万貫以上を要したというから、その量はきわめて老大である。それはまたそれに必要な山林を確保せねばならぬことを意味した。

明治一五年における近藤家の山林所有高は五、二四六町で、大正五年にはそれが七、五二〇町に達している。た、た、製鉄経営者は同時に山林経営者でなければならず、山林地主を兼ねていたことが理解されるのである。

操業の集中化とともに、これら木炭や産鉄の運搬には地域住民がその余業としてこれに當つた。これが地域の産業を開発し、住民の生活を潤したことはいうまでもない。運搬に必要な道路も整備され、根雨の宿が宿場街の性格の上に、諸職人を対象とする消費の街に変貌していったのはこれと関係がある。

しかし製鉄業が繁栄をきわめている間はそれでよいが、一端それがかげりを見せてくると、その不況の影響は地域住民全部に及ぶこととなり、近藤家の責任はきわめて重く、歴代当主の経営上の苦心には大きなものがあつた。

第四代平右衛門の時代を、近藤家における製鉄業の最盛期とするならば、明治維新後これを継承した、第五代喜八郎の頃はその隆盛にかげりを生ずる頃で、それだけに経営に腐心する時代であつた。

第五代喜八郎については、地租改正前後における、山林の買収や養草地の開墾等に関連してすでに記すところか

あった。しかし、製鉄業にかげりが現われるのは明治一〇年以後で、特に一四年以降はそれが顕著となる。

その原因の第一は維新以後次第に増大する輸入洋鋼の影響である。たゞ、製鉄は要するに今日の言葉で言えば手づくりの鉄である。その質からいえば純良で、貴重である。しかしそれは日本の従来の科学技術の長所短所を併せもつもので、その生産は多く職人の経験と勘とに依存していた。そしてまたエネルギーの大部分を人力に依存していたから、生産費に多くを要し、価格の面で大量生産による廉価な洋鋼に太刀打ちできなくなったのである。維新後の日本においては、鉄道や近代の軍隊の創設等により、鉄に対する需要は急増したのであるが、国産である和鉄に対する依存度は比較的に減少していった。これを明確に裏付ける洋鋼の輸入量に関する統計は必ずあると思うが、その方面の専門でない私はここにそれを呈示することができない。

第二の原因としては明治一〇年以降の国内不況で、和鉄が占めるべき日常什器に対する需要が激減したからである。一〇年以降、特に一四年以降の不況は、明治一〇年の西南戦役における赤字財政整理のために、大隈重信に代った松方正義がとった、デフレ政策の余波である。

近藤家所蔵の文書中に「日野郡製鉄鉾鍛冶場及砂鉄算出数量其他鉄鉾業ニ関スル事項取調書」というものがある。それは県庁か鉾山局かに提出した願書の附録として用意されたもので、その年月の記載はないが、明治一七年中のものと思われる。それによると明治一〇年以降の日野郡における製鉄業の衰退ぶりをうかがうことができる。

次頁上段の表は、同文書によって筆者が作製したものである。
また、その表の最後に左の文章がある。

年代	砂 鉄 採販所	製鋼所	鍊 鉄 鍛冶場	鋼(駄)	銃(駄)	鍊 鉄 (駄)
明治10	580	25	23	4,200	4,560	12,600
11	同上	同上	同上	同上	同上	同上
12	600	26	21	5,040	5,472	15,110
13	620	28	22	5,400	4,590	15,840
14	640	28	28	6,060	271	20,160
15	620	27	27	5,510	1,416	19,440
16	600	24	25	3,700	460	15,000
17	550	18	25	3,185	4,301	7,231

一鉄鉦業ニ拠リ從來郡中ニテ生活スル戸數凡四千戸人口凡一万六七千人然ルニ去ル十六年以來鉄業順次衰頽為メニ鉄鉦業人休業又ハ廢業ヲナスモノ多キヲ加エ随テ該業ニ従事スル郡民生活ノ路ヲ失ヒ年一年非常ノ窮迫ニ陥リ目下糊口ニ苦シムモノ不尠実ニ惻察スヘキナリ

一鉄業ノ為メニ生活ヲナシ郡民其種類多シト雖モ先ツ鉦夫及鉦業諸職人且砂鉄採掘業并ニ木炭焼鉄砂及鉄銃鋼運搬馬車等ナリトス

一鉄業衰頽ニ拠リ該業ヲ失却シタルモノハ即今糊口ヲ苦シミ親子兄弟等四方ニ離散シ日雇稼其他百方生計ヲ求ムルト雖世上一般不景氣ニ際シ大ニ困窮シ甚シキニ至テハ所々徘徊シ他ヘ食ヲ乞フモノアリ実ニ視ルニ忍サル慘状ヲ呈セリ

一前陳ノ如ク鉄業ノ衰退ニ拠リ鉦業人ノ減縮スルハ勢ノ免カレサル所ニシテ該業ニ従事スル郡民為メニ活路ヲ失ヒ最モ困難ヲ究メ鉦業人ニ於テ可成力ヲ尽シテ營業スルモ目下ノ景況ニテハ到底營統スル事困難ナリ依テ這回製鉄改良器械拝借ヲ上願シテ止サル以所ナリ就テハ是迄從

事スル郡民ヲシテ旧ニ復シ専ラ稼業ヲ勤メナサシメ以テ將來盛大ニ營業セント欲ス敢テ乞フ前件御高察願意御採納在セラレン事ヲ伏テ懇願スル所ナリ

同地方における製鉄業の実態を明かにするものがあると同時に、明治一六年以降の鉄鉱業衰微の実状を示すものなので、煩をいとわず全文を掲載した。そしてこの願書の趣旨が従来の人力依存を捨て、動力器械を導入したいということにあったことも分る。しかしそれにもまして、その直接の筆者は不明であるが、これが近藤家の人によって書かれたことはいうまでもなく、それは集中化し、集住化するようになった、製鉄業の浮沈がそのまま経営者たる近藤家の肩に、重い責任として覆いかぶさっている事情もこれによって知ることができる。

しかし近藤家は明治一七年代のこの危機を見事に乗り切り、明治二〇年代にいたって、他の同業者が多く廃業に追込まれたにも拘らず、日清・日露の両役を通じ、多量の玉鋼（たまはがね）という良質の鋼鉄を陸海軍各工廠に納入して国家的寄与をなしたとげたのである。

それでは近藤家がどのようにしてこの危機を克服したのであるうか。新知識・新技術の導入と、操業過程の動力化と機械化とによってである。

五代目喜八郎の次男八郎治は明治一八年発行の『日本鉱業会誌』第一〇号に「煉鉄ノ性質ヲ質シ併テ之ガ製煉法ヲ問フ」の一文を寄せている。そしてそれに対しては同じ誌上で小花冬吉（おばなふゆきち）がこれに答えている。小花は工部大学校冶金科の第一回卒業生で、卒業後は官営広島鉄山の技術指導者としてたたら製鉄の近代化に努めた、有名な冶金技術者である。⁽¹¹⁾ いま八郎治と小花のやりとりは、その現物に当ることができないので詳細は不明であるが、この頃、近藤家がその店員を呉海軍造兵廠に派遣して分析術を学ばせたということがあるが、それは小花との関係においてはなかったろうか。そしてそれが近藤家の製鉄に多くの技術的革新をもたらしたことは十分察知できる。

しかし技術革新は一朝一夕の事ではない。八郎治が翌一九一九年、『日本鉱業会誌』第一五号に投じた「伯耆国鉄鉱業ノ概況」は

(前略) スク舟車ノ便ヲ致セシニモ拘ハラズ鉱業ハ年一年ヨリ衰況ヲ呈シ閭郡(日野郡のこと——筆者注)ノ困難実ニ予メ憂フルニ足レリ現今閭郡ノ人口ハ三万九百七十五人其三分ノ一ハ概ネ鉱業ニ依テ衣食シ鉱業ノ盛衰ハ忽チ其頭上ニ関スルカ故ニ今日ノ如キ形状ニテハ数年ヲ閱セシテ更ニ一層ノ困難ヲ極メ窮苦貧窶ニ陥ルヤ期シテ疑フ可ラス希クハ一日モ早ク一大改良ヲナシ可成製品ヲ安キニ造リ益ス産出ノ巨額ニ至ラン事ヲ切ニ望ム所ナリ

(13)

と記している。先に掲げた明治一七年の願書の趣旨とはほぼ同様のことを述べている。しかし小花冬吉の技術指導や海軍工廠での研究が逐次成果を挙げつつあったのもこの頃であつたろう。もう一つ重要なことはたたら製鉄による産鉄の隘路は生産費Ⅱ人件費が高くつくということである。したがって廉価な洋鋼と太刀打ちするためには機械化や動力化によって人力を省き、生産コストを下げるとともに量産化を計らねばならない。先の願書の改良器械の拝借もその趣旨に出たものである。そしてそれが聴き容れられたのか、或は近藤家の自己資金によってそれを実現したのか(この方があり得る)、ともかくその合理化は実現した。

明治二一年の『日本鉱業会誌』第四五号に載せた、同じ八郎治の「伯耆国福岡山鉄鉱所近況」なる一文は新式機械や新技術によって同鉄鉱所が量産と省力化に向いつつあることを活々と伝えている。すなわち

一、該製鉄場（日野郡福岡村地内福岡山鉄鋼所、近藤喜八郎所有——筆者注）ハ昨年六月ニ着手シ当初六十尺ノ烟突ヲ築キ十馬力ノ汽罐ヲ据付ケ而テ五吋ノ汽鎚（スチーム・ハンマー——注）一台ヲ以テ鍛鍊ノ具ニ供シ傍ヲ蒸氣機関ヲ裝置シテ送風器ヲ据付ケ漸ク本年一月ニ至リ土木工ヲ竣ヘ爾來勉勵鍛鍊ヲ擬ラシタリシガ漸次好結果ヲ呈シ（中略）出来品ニ精良ニ赴キ……外見実ニ立派ニシテ疵等モナク而シテ其性合ノ如キモ漸次ニヨクナルト云ヘリ……

是ヨリ先キ近藤喜八郎氏が東西奔走シテ該位置ノ撰定ヨリ重量ノ汽罐（大凡千貫目ト云フ）及付屬ノ機械類ヲ米子ノ東岸ヨリ運搬セシニ或ハ橋梁アリ或ハ當時架橋未ダ竣ラズ不得止河中ヲ引渡ス等ノ事ヨリ其他未ダ曾テ試ミザルノ事業ニシテ果シテ其好結果ヲ見ルヤ中途ニシテ或ハ今日ノ現況ヲ見ル能ハザルヤ未ダ知ル可ラズ其今日迄ノ苦心焦慮ハ蓋シ少ナラザリシ赴ナリシニ図ラズモ精ニ精ヲ凝ラシ工風ニ工風ヲ積ミテ今ヤ殆ンド果ヲ結びシモノ、如シト……

新施設とその創業時の苦心を述べている。そしてその結果として生産高の増大を次のように述べている。

且出来高モ余程抄取初メハ一日ニ煉鉄正味百五十貫目ノ製出ナリシガ爾來二百六七十貫目ノ正味ヲ製スルコト、ナリ当今ハ汽鎚二台ニナリタルニヨリ煉鉄正味四百貫目ノ余ヲ製スルニ至ル

また動力の使用による省力の程度については

仮リニ今煉鉄正味四百貫目ヲ毎日製出スルトセバ從來ノ鍛冶屋八軒分ナリ今八軒分ノ人ヲ概算スレバ一軒拾六人トシテ百廿八人ナリ少クモ一軒十三人トスルモ猶百四人ハ要セザル可ラズ然ルニ該製鉄場ニテハ總計三拾人計ノモノナリ

と、從來の三分の一人に省力化し得たとしている。

しかし新技術による鍊鉄の生産は決して順調に行われたわけではない。動力による送風機の使用は砂鉄から銑の段階で、不純物を除去できないという欠陥があり、八郎治はそのことに関し

下ゲ鉄（銑鉄と鍊鉄の過渡段階——筆者注）ヲ製スルコト送風機ニテハ太甚難シ何ントナレバ送風機ノ風ハ何如ニモ強激ハ強激ナリト雖ドモ始終順風ニテ過不及則俗ニ驕風ト云フ事ノ出来ザルヲ以テ此駁雜混淆ノ汚物ヲ去ルコト難キヨリ機械ノミニテハ真ノ精良品ヲ製スル難カリシ

と述べている。そしてこの欠陥は大阪の技師久松吉三郎の助言と指導により、從來の鞴轆を併用することによって解決をみた。そのことについて八郎治が

一朝機械ヲ製置シ旧法ハ全廢ノ点ニノミ注意シ如何ニモシテ之レヲ仕遂ント思ヒシトキニハ素リ職工等モ氣付カザリシガ其中氏（久松吉三郎）ガ工風セラレ目今其便ニシテ且捷ナル前日ノ比ニアラズトイヘリ蓋シ洋和折衷ノ

	鍊鉄(貫)	鋼鉄(貫)
明治27年	27, 500	12, 200
" 28年	23, 400	7, 000
" 37年	72, 360	120, 330
" 38年	173, 500	139, 020

法ハ當ニ之レノミナラズ萬総ヲ必用ノモノト信セリ⁽¹⁴⁾

と述べているが味わうべき言葉である。

この新施設と新技術による産鉄は日清、日露の両役において陸海軍両工廠への大量納入となり、その数量は上の表の通りであった。⁽¹⁵⁾

明治二九年の近藤家の鋼鉄の総生産額は一四万三、〇〇〇貫であるから、その大部分が銃砲弾の材料として納入されたことが分る。

その功績によってであろう、五代喜八郎は日露戦役後勲六等に叙せられている。

勝瀬八郎治の生涯

五代目喜八郎はその積極的な経営によって、ひとたびは危機状況におち入った伝統的たたら製鉄に新しい時代の息吹を注入し、二度目の隆盛期を迎えた人として、近藤家中興の主といつてよいであろう。しかしその功業はこれまで見てきたように、その次男八郎治の献策と協力によるところが大であった。この近藤家中興の人、八郎治こそは、私をしてこの稿を書かした、勝瀬康三氏の祖父に当る人である。少しく八郎治の生涯についてふれるところが必要ならぬ。

八郎治は元治元年（一八六四）六月二十四日、五代目喜八郎を父とし、その次男として根雨に生れた。そして明治

一七年七月一六日付で、当時大阪市西区靱南通四丁目在住の勝瀬善之丞の養子になっている。勝瀬家への養子の事情は明らかではないが、大阪の靱南は、かつて江戸時代の末、近藤家が鉄販売のため支店として備後屋喜兵衛店を置いたところである。備後屋という名からして、それは近藤家の祖先の出身地であるから、近藤家と勝瀬家との間には何らかの関係があったのではなからうか。(補二) また『日野町史』には八郎治の入籍後、間もなく「勝瀬家は根雨に移り住み」とあるが、それまで八郎治が大阪において養父母と同居していたかどうか不明でない。ただ八郎治の子脩一郎(勿論康三氏の父)は自から「明治十六年九月十五日午後三時近藤本家之裏座敷生ル」と記しているので、そうすると、八郎治の明治一七年の入籍は単なる戸籍上のことであって、実際の養子縁組はそれよりさかのぼるのであろうか。この間の事情は不明である。(補三)

私は先年近藤家を訪れた時、その土蔵中の文書の中から「見聞輯録 近藤氏」という一文書を発見した。それには毛筆で記された二頁の「緒言」があり、その末尾には

明治十三年五月上浣 近藤篁雨 謹誌

とある。篁雨は八郎治の雅号である。元治元年生れの八郎治は明治一三年の時点、実に一六歳である。これが一六歳の少年の文字であるかと、その達筆ぶりは脅威でさえある。しかもその緒言に記すところは左の通り到底一六歳の見識とは思えない。

夫レ此見聞輯録ト題セシ所以ノ者ハ専ラ新聞紙新書冊或ハ布告布達諸月報旬報等ノ中ニ緊要必需ノ事情アラバ必
ス之レヲ抜稿詳記以テ普ク当用之便ニ供シ汎ク官民ノ間ヨリ時運ノ變遷如何ヲ弁知セシムルモノナレバ苟シクモ
只一人ニ止マラス或ハ商況或ハ新工夫或ハ管内ノ臨時況或ハ色銀賃ノ騰貴融通ノ景情或ハ貿易上輸出入ノ多過等
見ル所アレバ衆（一字不明）漏洩ナク精密ニ記勒スルヲ要スル議ナリ

と記し、このことが「他日公益ヲ計ルノ一助トナル」ことの確信をも記している。

そしてその最初に、明治一六年一二月一五日付の官報第一四一号所載の、「鉾山巡視報告書摘要（文部省報告）」
を記録している。そしてその報告書が近藤家所有の吉鉄山について

吉鉄山ハ伯耆国日野郡根雨駅ノ住近藤喜八郎ノ所有製鉄場ニシテ起業以來既ニ若干年ヲ経タリト云フ^{ナベ}渾テ鉄山ハ
必ズシモ永ク一所ニ設置スルモノニ非ズ鉄砂ノ減少スルニ從ヒ時々其製場ヲモ他所ニ移転セザル可ラズ云々

とあるのに対し、八郎治はその上欄に、

製場ノ移転ハ鉄砂ノ減少ニ非ズ木炭の激少ニヨレリ

と注して、報告書の誤りを指摘している。また、報告書が粗鉄精製法に関して

此ノ法ヲ下ケ鉄業ト云フ按ズルニ粗鉄ヲ灼熱シテ其ノ中ニ含有スル滓分等ヲ溶解離流セシムルノ意ナルベシ其施方ハ単ニ地面ニ凹処ヲ作り木炭ヲ重積シテ火床トナシ其中ニ粗鉄數塊ヲ入レテ炎熱スルナリ但シ火度ハ甚劇烈ナラズ是唯粗鉄中ニ駁雜スル所ノ汚物ヲ溶解除去スルノミノ目的ニ由ルカ（中略）而シテ此ノ結尾ノ業ハ唯鍛夫ノ自然煉磨ノ功ニ一任スルガ如シ（下略）

と述べているのに対し、八郎治は同じくその上欄に

下ケ鉄業ノ事ハ貴按ノ如クナラン而粗鉄ヲ一度灼熱セザレバ職工製造ニ困^ゑシメリ何トナレバ粗鉄ヲ直ニ鍊鉄ニセント欲セバ硬固ニシテ疵傷ヲ来シ精製スル不能一度灼熱則下ケ鉄トナシタル已上ハ甚柔軟性トナリ精製甚ダ容易也

と注し、鍊鉄を得るために必要な過程であることを強調し、単にそれが不純物除去のためのものでないことを指摘している。

このように巡視官吏の皮相短見の觀察に対しては反駁した八郎治も、該報告書がその末尾において

斯ノ如ク粗鉄ヲ製スル法ノ主意ハ原^{もと}学理ニ由ルト雖ドモ独リ精製法ノ拙ニシテ不完全ナルガ為メニ毎々販売スル所ノ煉鉄等概ネ貧質ニシテ用ヒテ器物ヲ造ルモ強硬ニシテ鑪^ろ錐ヲ碎損シ却リテ器物ヲ毀ツニ至ル即皆精製法ノ惡

シキ所以ニシテ世人ノ好ミテ外国産ノ鉄ヲ使用スル事多キハ勢ノ免レザル所ナリ

と指摘する時、八郎治はこれに全面的に賛成し、

猛省セズンバアル可ラザルナリ

と記し、次いで

我業ノ困且切ナル思フベシ

と嘆じている。そして報告書が続けて

夫製鉄ノ業ハ鉞業中至難ノ事業ニシテ欧州ニ於テスラ尚繼興ヲ究ムルニ至ラズシテ日夜其ノ方案ニ苦メリ本邦製鉄者ノ如キ古来因襲ノ方法ヲ以テ白ラ安ジ其ノ改良ニ着目セザルガ如シ現ニ該業ニ衰頽ヲ来シテ島根県下ノ如キハ殆ト三万余リノ人其ノ口ヲ糊スル能ハザルノ状ヲ呈セリ是製鉄業者ノ不注意ヨリシテ輸入鉄ノ増加（本邦製鉄ノ需用ヲ増ニモセヨ）ヲ致セシニ由ルニ非ズヤ今此ノ衰勢ヲ挽回スルノ方ハ他ナシ当地方ノ製鉄業者ニハ資本ニ乏シカラサルモノ多ケレハ舊ヒテ相互ニ聯合協力シ早ク本業ニ改良ヲ加ヘテ其面目ヲ変スルニ在リ然ラバ則

独り自己ノ幸福ノミナラズ実ニ国家ノ大事ナリ是ニ由リテ言ヘハ製鉄改良法ハ実ニ富国ノ基ト云フモ敢テ不可ナカルベシ

と現製鉄業者の怠慢を厳しく批判する時、八郎治は

日本ノ商業者ハ大約此ノ如シ蓋シ今日迄ハ止ムヲ得ザルノ次第ナリシ

と記し、また

製鉄業上改良云々ハ然、此已后ニ在リ

とも記している。

若き日の八郎治の深い反省と決意とが表明されている。

「見聞輯録」には先に掲げた官報第一四一号に続いて、一六年二月一七日発行の第一四二号の、鉱山巡視報告の続編をも収めている。

八郎治が数多くの情報の中から、その家業に必要な部分を集め、絶えず研究し、改良し伝統的製鉄業に近代化の光をあてつつあったことが知られる。そしてそれは前々節において述べたように、数回にわたる『日本鉱業会誌』

への投稿も、そしてまた諸施設の改良や新技術の導入も、このような日頃の研鑽と反省とによるものであることが分る。

しかもそれが八郎治の二〇歳前後のことであることを知る時、天才ともいべき異常な才能と、その実行力とに改めて敬意を表せざるを得ない。

そればかりではなく、『日野町史』の記すところによれば、八郎治は明治一四年一月には駅通局七等郵便取扱役に任命され、後、根雨郵便局長にもなったという。これは地方素封家の次男として、その職に就かされたとも思われるが、郷党のために大いになすところあらんとした気概を感じることができる。

しかも八郎治は明治一八年二月一日には一時上京して宮内省雇を命ぜられ、翌一九年三月末まで在勤したという。⁽¹⁶⁾これは勝瀬家と養子縁組をした翌年であるが、どのような理由で、そして宮内省においてどのような仕事に従事したかは不明である。(補四)しかしこの時期はまた『日本鉱業会誌』への投稿も行われていた頃で、家業の挽回に精力を傾注していたのである。この家業と官職との関係も明らかでないが、何らかの理由があつてのことであつたろう。彼はまた明治の初年に福沢の門下として慶応義塾に籍を置いたというが、その時期がこの上京期間の前後に当るのであろうか。(補五)

また明治二三年五月には根雨に瞬成舎と名づける印刷所を興し、自から舎主となったという。そしてその印刷所は松江市の第一活版所から福島という職工を招いて創業したもので、明朝活字を主体とし、各役場、郡役所等の書類の印刷に当つたという。⁽¹⁷⁾

この印刷業という近代的事業は、彼の在京時代の見聞が然らしめたものかどうか明らかではない。

その他『日野町史』は、彼が同じ根雨の小松屋鷺見菊太郎に出資して饅頭の製法を研究させ、後、「祇園まんじゅう」の名で売り出させたことを記している。⁽¹⁸⁾

八郎治はこのようにすぐれた経営者であり、事業家でもあったが、平常和歌、俳句、漢詩等をよくする風雅の人でもあった。ことに書をよくし、根雨神社の奉額は彼の手に成るといふ。左に『日野町史』所収の彼の和歌ならびに漢詩を掲げておく。

宝仏暮雪

春ははや暮れてもゆくを山川の道たにわかぬ峯の白雪

延暦寺晚鐘

時つくるかの山寺の鐘の音もいたりたらぬ川風ぞ吹く

春日尋花

携節乘簪遠尋芳 処々看花春服香

返照春西人不見 独歩村蹊興情長

秋雨懷郷

雨深孤雁叫遙天

旅館通宵輾寂然

千里客魂眠不就

歸心切切坐燈前

まことに往くとして可ならざるなき多才の人の多彩な生涯は、意外に短く、八郎治は明治二六年五月三〇日、年わずか三〇歳で病没している。まことに惜しみても余りある死であった。(補六)

この八郎治の子が脩一郎で、勝瀬康三氏はこれを父として生れたのである。

私はこの稿において、いまだ勝瀬氏の御依頼に答えていない。紙数の制限もあるので、本論というべき依頼事項への回答は次号にゆずらざるを得ない。

手にし得た限りの文献による叙述であるが、私の読み誤りもあるうし、考察の届かないところもあるう。根雨周辺の方々、および近藤家や勝瀬家の縁に連なる方々の御批正を得て、正鵠を期し得るならば幸いである。

- (1) 越智正典『紺碧の空』二〇二頁
- (2) 速水保孝『出雲―ヘルンの見た神々の国―』五五頁
- (3) 石塚尊俊『鉄と民俗―中国山地のたたら地帯を中心に―』二二六頁
- (4) 『日野郡史』後篇二三八五頁
- (5) 住田勇『たたら製鉄』一六〇頁(江戸時代図誌19山陰道)所収)
- (6) 飯田賢一『日本人と鉄』一一二頁にはその写真が収められている。
- (7) 奥村正二『火縄銃から黒船まで』(岩波新書)五頁。
- (8) 『日野町史』下の一八九頁より引用。
- (9) 松江、島取両藩の製鉄に関する政策の特色については、主として中尾鉦「鉄山師金も力もありにけり―日野郡の近藤家の場合―」に拠る。

た。

(10) 『日野町史』下の一九四頁

(11) 飯田賢・『日本人と鉄』二〇頁

(12) 『日野町史』後篇二二六七頁

(13) 勝頼家私家版『翠雨作 春秋』二五頁より引用

(14) 同右二八・三〇頁から引用。

(15) 『日野町史』下の一九八頁。

(16) 同右二〇七頁。

(17) 注の(13)に同じ。同書一頁。

(18) 注の(16)に同じ。

(補一) 大坂落城後、塙団右衛門(ばんだんえもん)が備後と出雲の境にある高野山(たかのやま)に隠棲したが、三名族の一人、桜井三郎右衛門はその血筋を引くという。また後説する八郎治の母カメは、この高野山の出身で、近藤家に嫁したというから、同じ製鉄業関係者の間に姻戚関係のあったことが知られる。

(補二) 勝瀬善之丞は阿波徳島出身の漢学者で、当時たまたま備後屋喜兵衛店の前に居住していたという。したがってその縁組は鉄業が直接的役割を果してはいない。

(補三) 八郎治の養子縁組はもっぱら徴兵逃れのためであったという。当時の徴兵法においては、免役概則というものがあって、戸主、独子、独孫、養子等は徴兵を免ぜられた。したがって次男である八郎治は、徴兵を免ぜられるためには他家に養子にいかなければならなかった。

(補四) 八郎治の宮内省における仕事は大臣官房秘書もしくは文書課の下僚ではなかったかという。現在近藤家

には八郎治がもたらしたと思われる、明治天皇の親王や内親王の命名書の綴りなどがあるという。なお彼の宮内省奉職は山岡鉄太郎（鉄舟）が推挙したのではないかともいう。山岡は旧幕臣であるが、明治五年、勝海舟の強い要請で宮内省に入り、のち初代侍補官として天皇の側近にあったから、その推挙は十分にあり得るところである。しかし八郎治と山岡との出会いの詳細は不明である。或は旧幕臣大鳥圭介とも親交があったというから、その紹介によってでもあろうか。

（補五） 八郎治は宮内省出仕以前、おそらく明治一四、五年の交、無断上京している。近藤家の番頭が搜索したところ、新橋烏森の黒田清隆の妾宅に潜んでいたという。彼の慶応義塾入学はこの時期であったと思われる。かつて近藤家には慶応義塾の月謝通帳と思われる和綴の書類があったという。それによれば彼の在学時期が確定できるのであるが、残念ながら現在その所在は不明であるという。

なお八郎治の二度にわたる上京は、母カメ（一六才で高野山から近藤家に嫁した）の保守的な傾向を嫌うてのことであった。ちなみに八郎治は日常牛乳を飲み、牛肉を好んで食べたという。

（補六） 八郎治が死んだ五月三〇日には、根雨地方の初夏に特有な小驟雨が降りこめ、山峡の老若男女、共に涙を流してその死を悼んだという。

追記 補注一と六はすべて成稿後、勝瀬氏からのご教示によった。